外国につながる子どもの日本語教育に関する研究：日本語教育技能育成独自プログラム開発の模索

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内橋, 一惠 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-tokiwa.repo.nii.ac.jp/records/1086

4-B-4

外国につながる子どもの日本語教育に関する研究
―日本語教育技能育成独自プログラム開発の模索―

内橋一惠[1)]

令和元年 5 月時点での長田区における外国人数は 7,146 人。中央区に次いで外国人数が多い。また、統計には現れない帰化外国人の数も相当数存在すると推定される。

ベトナム籍など、最近来日したニューカマーと呼ばれる人々やその子弟は言語コミュニケーションで大きな課題を抱えている。彼らの子弟は日本で生まれ育っていたとしても、その多くが特に学習言語の習得に困難を抱えることが多い。外国にルーツのある子どもが一見日常会話が問題なくできていても成績が振るわない原因が、この学習言語の習得にあることが多い。学習言語の習得の困難さは、成長の過程での移動による継続的な言語習得の断絶と、家庭での言語習得の機会の少なさにあると考えられている。

現在の日本の学校教育現場での日本語習得あるいは教育への理解やフォローは非常に手薄であり、これまで一部の学校では日本語教育ボランティア等が、あるいは地域の NPO など各種団体が子どもたちの学びを支えてきた。しかし今後は教師そのものが日本語習得や教育についての知識を持ち、適切な支援をコーディネートする、あるいは直接指導をする必要性が増すことが予測される。

現在長田区内にある駒ヶ林小学校の JSL 教室で子どもたちに接しながらフィールドワークを行うとともに各関係者にインタビューを行いながら、本学で育成する教育人材の子どもへの日本語教育技能育成の新しいあり方を模索している。

1） 事務局